

大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業
(イノベーション対話促進プログラム)
実施状況報告書

夢立国プロジェクト～夢を力に～

平成26年3月
国立大学法人 新潟大学

目 次

1	当初計画の概要等	3
(1)	当初設定した事業の目的	3
(2)	実施体制	3
2	業務の実施状況	3
(1)	事業全体の概要	3
(2)	実施したワークショップの詳細	4
①	夢立国第1回ワークショップ	4
②	夢立国第2回ワークショップ	9
③	夢立国第3回ワークショップ	11
④	東区まちづくりワークショップ	13
⑤	内野中学校夢集会ワークショップ	14
⑥	発明ワークショップ	15
⑦	夢コンサル	15
(3)	実現可能性調査	17
(4)	夢立国プロジェクト評価委員会	17
(5)	事業協力者会議	17
3	事業実施により得られた知見・課題等	18
(1)	本事業による一連の取組を通じて得られた知見・課題等	18
(2)	今後の活動への展望	18
4	その他	18
(1)	学生スタッフ	18
(2)	新聞等掲載一覧	19
(3)	評価委員長評価報告書	21

以上

1 当初計画の概要等

(1) 当初設定した事業の目的

テーマ：夢立国プロジェクト～夢を力に～

本事業では、本学がこれまでに産官学連携で個々に取り組んできた以下の三つのプロジェクト（以下「Pj」）について、それらを夢立国 Pj として統合することで、地域社会にイノベーションと繁栄をもたらすことを目指す。産官民学の関係者が一堂に会した対話型ワークショップ（以下「WS」）の開催により、潜在力を最大限に発揮した長期ビジョンを策定する。これらのビジョンに基づく斬新かつ大胆な施策の展開により、地域社会で抱える様々なボトルネックの課題を全く新しい切り口から解決し、地域社会にブレークスルーをもたらす。この夢立国 Pj は、長期ビジョンを「夢」として各 Pj の中核にすえ置き、新しい社会の創造を目指すものである。

1. NIIGATA SKY PROJECT（以下「SKY Pj」）

2. 燕プロジェクト（以下「燕 Pj」）

3. 高齢者就労促進プロジェクト（以下「伝承 Pj」）

上記のテーマは、いずれも COI STREAM で掲げる「少子高齢化先進国」、「豊かな生活環境の構築」、「活気ある持続可能な社会」に寄与するものである。地域と企業と自治体と大学が連携し、取り組むものであり、新たな研究分野が開拓されることが期待されるだけでなく、地域社会活性化へのドライビング・フォースとなるものである。

上記3テーマの他、WS 手法の普及を目的とした「出前型ワークショップ」を行い、様々な地域課題の抽出に取り組み、本事業の裾野を広げる。

対話手法としては、文部科学省の「イノベーション対話ツール」、対話型発明創造技法、暗黙知教育、分科会方式対話手法を、必要に応じて適宜組み合わせ使用する。

(2) 実施体制

《本事業のマネジメント体制》

本事業の実施にあたり、ファシリテーターをつとめる新潟大学教職員（人文社会・教育科学系、自然科学系、医歯学系含む）、コーディネーター、URA 等をメンバーとする「夢立国プロジェクト実行委員会」を、産学地域連携推進機構の下に設置し、産学地域連携推進センター教授松原幸夫が委員長を務める。この実行委員会を中心として、同機構と研究支援部が WS 参加者の公募やファシリテーターの手配などの運営を行う。

このマネジメント体制により PDCA サイクルに基づき事業運営を行うとともに、外部評価委員会を立ち上げ、WS 運営の改善を図る。

《ファシリテーター人材の確保、学内専門人材の配置》

学内では、産学地域連携推進機構教職員 5 名、コーディネーター 1 名、URA 6 名、人文社会・教育科学系教員 3 名をファシリテーターとして確保し、ファシリテーション関連科目履修生等（大学院学生含む）約 40 名を WS 実行スタッフとし、ファシリテーターとして育成を行う。

学外からは、新潟市、燕商工会議所および F&C ヨシザキファシリテーションチーム等の学外 WS 支援機関から、WS のテーマに応じてファシリテーターを確保する。

本事業で使用する様々な対話ツールとファシリテーション技術は、来年度以降も本事業にそった個々の取組みの中で活用していく予定である。

《学内の支援体制》

事業実施のコア組織の他、メイン会場となる附属中央図書館職員、ファシリテーターとなる各学部教職員が本事業を支援する。参加者を公募する際には、全学同窓会、広報センター、学生ボランティア本部およびキャリアセンターが支援する。

2 業務の実施状況

(1) 事業全体の概要

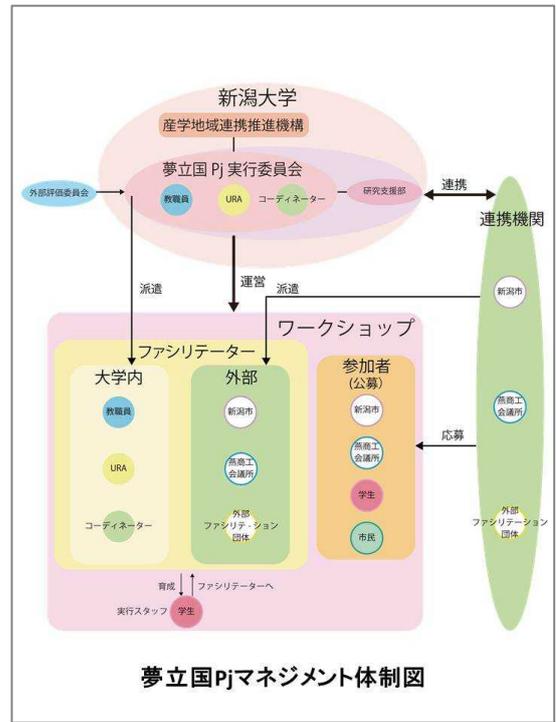
「夢立国プロジェクト実行委員会」が中心となり、事業目的に沿った以下の WS の運営をマネジメントし、円滑な事業運営を行う。また、外部評価委員会を立ち上げ、各 WS の開催の都度、実行委員会と意見交換会を開催し、事業運営方針を見直し、WS の質の向上と WS のツールとしての改善を図った。

上記の他、Pjリーダー会議、事業協力者会議を開催し、「夢立国プロジェクト」の目的に沿って目標を定め、各種WSの開催時期、目的、参加者などを決め、実行した。

実行委員会の下に、新潟大学教職員、コーディネーター、URA等をメンバーとするスタッフチームを設置し、各事業項目を横断的に担当した。チームには、実行委員会が任命した担当責任者を置く。各スタッフチームは、学内チームと学外チームからなり、両チームが対等な立場で議論し、実施計画を立案し、運営を進める“デュアル・サポート体制”とし、適材適所・臨機応変、迅速かつ効率的な運営体制を構築した。

これら実行委員会、各スタッフチームと、WS参加者の公募やファシリテーターとの連絡調整などを行う研究支援部、WS実行スタッフが連携し、本事業の運営を行った。

分野を越え世代を越えた異質なプロジェクトを産官民学のオープンなダイアログを通して融合することにより、イノベーションを創出することをめざした。奥ゆかしく控えめな県民性に配慮し、共感デザインを駆使し、話しやすい「場」をつくることを重視した。



夢立国プロジェクト実行委員会（委員長：松原幸夫）	
総括チーム	経営・連携チーム
SKY Pj チーム	WS チーム
燕 Pj チーム	共感デザインチーム
伝承 Pj チーム	学生・若者チーム
技術育成チーム	広報チーム

(2) 実施したワークショップの詳細

3回の「夢立国ワークショップ」のほか、様々な地域課題に取り組むために出前型の「夢集会ワークショップ」、「まちづくりワークショップ」を実施した。また、個々の実務課題に対応するための、異分野のシニアコンサルタントGr.による「発明ワークショップ」と「夢コンサル」を実施した。（詳細については、夢立国Pj公式ホームページに掲載した本報告書詳細版参照）



①夢立国第1回ワークショップ

ア. ワークショップの概要

日時：平成25年11月9日

開催場所：新潟大学（新潟県新潟市西区五十嵐2の町）附属中央図書館

参加者：136名（この内、WS参加者91名）

対話手法：ブレインストーミング、未来新聞、ランキング

ファシリテーター：（1.（2）実施体制参照。）

・ワークショップの目的・テーマ

三つのPjの目的はそれぞれ以下のとおりである。

《SKY Pj》

SKY Pjは、新潟県内の航空機産業の裾野を広げ、地域技術の高度化を図るため、無人飛行機（UAV）の研究開発に取り組んでおり、先導的な企業力を有する。このPjが抱える課題は、

複数工程の一括管理・一括受注を可能にするものづくりプラットフォームの立ち上げ、UAVの用途を広げるマーケティング力、高い技術力をもつ専門職人材の育成の三点である。開発参加企業を順次拡大させ航空機産業クラスターの中心となることを目指している。

《燕 Pj》

燕商工会議所では「磨き屋シンジケート（共同受注）」、「磨き屋一番館（若手人材育成）」、「メイド・イン・ツバメ認証委員会（地域内製造と地域ブランド）」等の先進的なプロジェクトを立ち上げ、県央地域のものづくりの活性化に取り組み、全国から先進事例として注目を集めている。これらの取り組みをさらに拡充し、県内全域に展開していくためには、「売れる商品づくり」と「技術力の向上」が課題となっている。



《伝承 Pj》

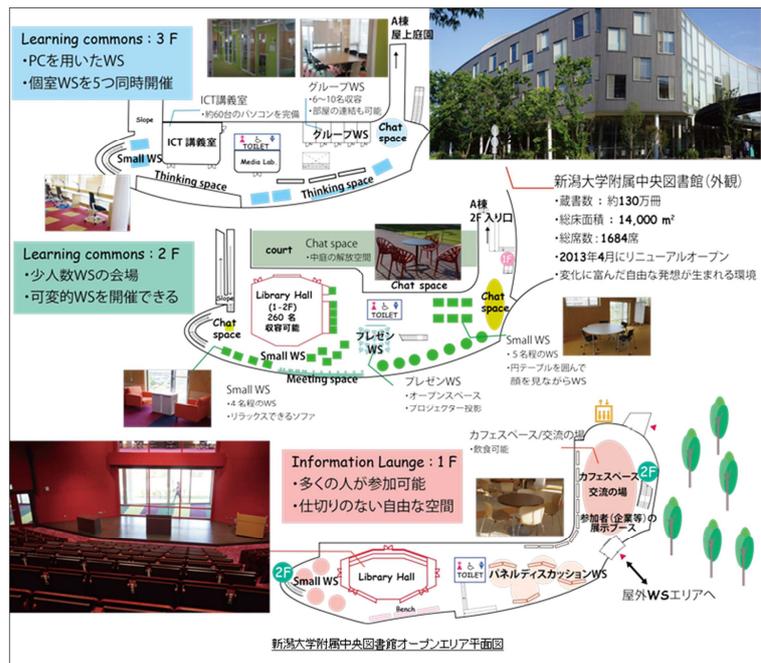
平成 23、24 年度に、新潟市は大学連携事業「安全と健康が確保された高齢者就労を可能とする社会づくり推進研究」を実施し、市内の高齢者の就労と受け入れ側企業の実態調査を行うとともに、国内外の高齢者就労の先進事例調査を行った。少子高齢化の進む中で、研究成果を早急に実効性のある施策に落とし込んでいくことが、課題となっている。

上記の3Pjは、互いに関連する問題をもっていると同時に、他のPjの先進事例にもなっており、補完関係にある。伝承Pjは、他の二つのPjの専門職人材育成において国内外の先進事例を提供する。燕Pjは、SKY Pjに対して、ものづくりプラットフォームの先進事例と高精度研磨技術を、また伝承Pjに対しては、高齢者就労の実施例を提供する。SKY Pjは、伝承Pjが提案する就労モデルの社会実験の場となり、燕Pjに対しては、先端技術の研鑽の場を提供する。このように各Pjは相互に補完し合っている。

本ワークショップは、以上三つのPjの促進とともに、対話型イノベーション手法の確立、および地域社会の活性化を目的としている。

・ワークショップ設計に当たった仮説・狙い

ワークショップの設計に当たっては、中高生、大学生からシニア層まで、幅広く世代を超えた参加者が自由に発想できるよう、肩書きや年齢を意識せず交流できる場をつくることを重視した。成果物についても、参加者全員が共感し、共有できるようマイストーリーを作成した後、10年後の未来新聞を作ることとした。「ワークショップの進め方」等の説明資料も、できるだけ共感が得られやすい環境をつくるため、わかりやすく親しみやすいものとした。ワークショップで多くのアイデアが



参加者から出されても、そのまとめの段階で、一部の参加者の意見だけで、意見の集約が行われることを防ぐため、各参加者から2件ずつマイストーリーを出すようにし、全参加者の評価点が多い順に評価される「ランキング」の手法を用いることとした。

また、「考える場」ではなく「感じる場」とするため、アイスブレイクとして暗黙知教育の「感性ダイアログ」を使用することとした。また、先入観にとらわれない自由な発想ができるように、課題についての詳細な説明に入る前に、「アイデアシート」を記入することとした。

WSの会場は、新潟大学中央図書館1階フロアとライブラリーホールを使用した。同図書館は仕切りのないオープンラウンジを広く設け、多目的使用が可能である。WSを行う際は、オープンラウンジ、個別ブース、ライブラリーホールなどを活用し、様々な参加者に対しディスカッションに適した環境を提供し、伸び伸びとした自由な発想を促すことができる。グループディスカッションの後、各自で自由に構想を練る時間（Thinking Time）を設ける。

・実施状況

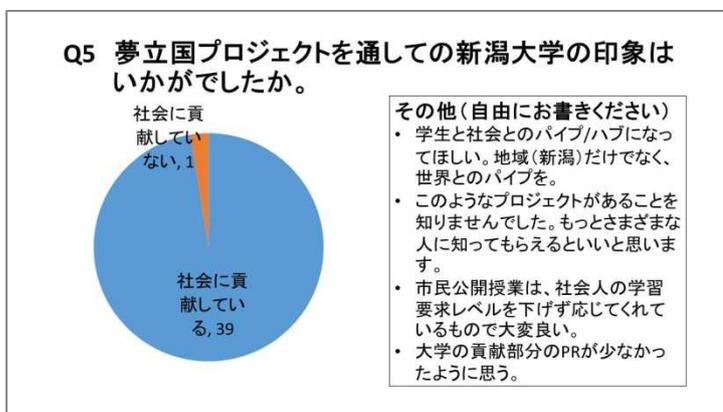
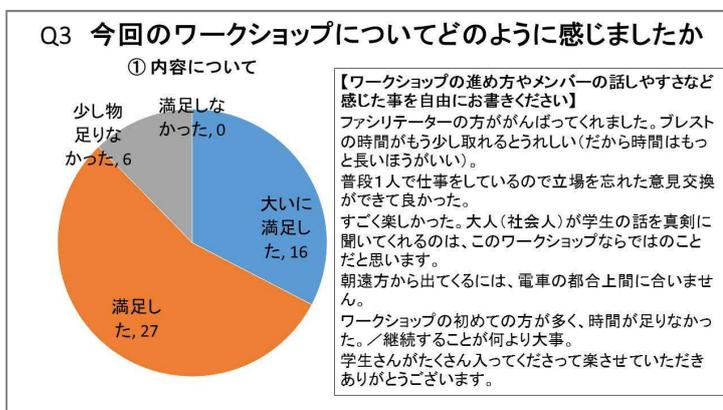
夢立国ワークショップでは、最初にアイデア出しを行った。記入したアイデアシートの内容をベースに、各自がマイストーリーを作り上げた。続いて各グループ内でランキングにより順位づけを行い、それらをまとめて一枚の未来新聞を作成した。作成した新聞は、Pj毎のフロア発表会で使用した。各グループ持ち時間3分で、アイデアをPj内で共有し、最後にライブラリーホールで全体発表を行った。

当日の参加者は91名であった。表のとおり、今回のWSは概ね好評であった。特にシニア層の参加者からは、「若い学生達と新鮮な対話ができてよかった」「今後も本Pjの継続を望む」との感想が多かった。

基調講演では、NECの小笠原雅弘氏に「夢を力に～はやぶさを継ぐもの～」というテーマで夢

を追い続けた「はやぶさ」が新たな宇宙事業を切り拓く話をしていただいた。さらに、本Pjの趣旨を、参加者に文字だけでなく、五官を通して体感していただくために、地元のミュージシャン長谷川裕二氏に協力していただき、メインテーマ「夢を力に」、間奏曲、テーマソング「朝日にかおる」の3曲を作成した。

WSのメンバー編成にあたっては、当初参加者の性格別（Ex. 夢志向型、福祉型、課題解決型、人生を楽しむ型、図参照）に大きく4グループに分けた上で、4～5人単位で小グループを編成することを計画し、WSを試行したところ、同じ傾向のアイデアばかり出て、グループで討議しても同じ論調の意見ですぐにまとまり、新たな気づきや斬新なアイデアの創出には効果的でないことがわかった。この改善策として、当日はテーマの希望だけを取り、その他の要素（年齢、性別、職業、価値観等）はできるだけシャッフルされるよう配慮した。



当日は誰でも参加できるように、ポスター上で「お子様連れの方」の参加も呼びかけ、実際に小学生も参加した。小学生も大学生や大人たちに混じって物怖じせず自分のアイデアを出せていたようである。

WSでは通常付せんを用いてアイデア出しが行われるが、付せんでは一つひとつのアイデアが分断され連想が起きにくい場合がある。また文字数も制限されるため「書くことによる連想」が阻害される場合がある。また、テーマについて、詳しくテーマ説明をすると、参加者がこれまでの日常体験で感じていた

ことや、参加者独自の思いを表出することに気後れし、アイデアが出にくくなることもある。そこで本Pjでは詳しいテーマ説明を行う前に、「1行の説明文」だけで自由記載できるような「アイデアシート」を使用することとした。

このアイデアシートも記入欄が広すぎると参加者へのプレッシャーになるので、記入欄は1問につき4~5行の空白欄を設けることとした。「考える」ことから「感じる」ことへのアイズブレイクを行った後、アイデアシートに記入していただいたが、資料にあるとおりアイデアシートで自由なアイデア出しと、アイデアの連想が行われているように思われる。またこのプロセスにより、後で行われる付せんによるアイデア出しもスムーズに行うことができた。

グループ内でのランキングでは、各WS参加者から、一人2枚ずつ出されたものを、各自が「いいね」と思う順に貼り付けるので、一部の（明確な価値観を持っている？）参加者が、様々なアイデアを切り捨ててしまうこともなく、出てきた結果に対する参加者の満足度は高い。集計して出てきた総合評価点で得られた最終的な総合順位は、参加者の心の底流に流れるある感性を反映しているように思える。いずれにしても、一人の頭で考えた結論とは異なる、参加者の総意を反映した価値観の成熟度に、驚かされることがよくあった。十代から二十代の若者たちと、六、七十代以上のシニア層が、その中間の世代とは異なる共通の価値観を持っているケースも多いように思える。

ランキングの評価については、「いいね！」を用いた。「よいもの」という評価は、思索的な「総合的な価値判断」であるのに対し、SNS等で用いる「いいね！」は価値判断というよりは直感的な判断であり、さらに「いいね！」と「！」マークをつけることで、心の「琴線」に触れるものが選ばれやすくなるのではないだろうか。

マイストーリーは、一人5~10枚書くようお願いしたが、必ずしも「いいね！」には、該当しないが、捨てがたい付せんもある。例えば、「気恥ずかしい」、「今技術ではとても無理」、「奇抜すぎる」というようなものについては、「いいね！」では落ちることがあるので、別枠で「これは面白い！」という標語で拾うことにした。これについては、件数制限や、絞込みは行わないことにした。

第二回目のWSでは、これらのアイデア等をいかにして実現可能な実行プランに落とし込むWSにするかが課題として残された。このための施策として、「WSのテーマ」を現実の課題解決に役立つものにした。さらに成果物も「5年後の未来新聞」とすることとした。各Pjリーダーから提出されたWSのテーマの選択については、参加者の自由意思に任せ、テーマグループ毎の人数調整は行わないこととした。



WSの後、隣接する生協第一学生食堂でWS交流会「五十嵐の夕べ」を開催した。学生サークルの新潟総踊り連「新舞」、黒崎太鼓振興会の「黒崎太鼓」、大学南が丘自治会の佐渡おけさなどの演奏や踊りを通して、一体感を醸成した後、学生、一般市民、教職員が世代を超えて明日の新潟、明日の日本について語り合った。



ワークショップの会場

・スケジュール

時間	内容	場所
9:30～	受付	図書館エントランス
10:00～	開会式	ライブラリーホール
10:40～	移動	
11:00～	ワークショップ①	図書館内
12:00～	昼食	第一食堂
13:00～	ワークショップ②	図書館内
13:55～	中間発表	
14:45～	移動	
15:00～	基調講演	ライブラリーホール
16:00～	全体発表	
16:30～	閉会式	
17:00～	交流会	第一食堂

イ. ワークショップの検証

・課題と改善点

WSの目的について、当初の目的に「対話型イノベーション手法」の確立だけでなく、「地域に何でも話し合える風土をつくる」ことも掲げていたが、この点についても、達成されたものと思われる。その一方で、自由な発想ができるように一般参加者が取り組みやすいテーマを中心に選び、現場で直面している実務課題についてはあまり取り上げなかったため、これらを以後のワークショップでどう取り込んでいくかが課題となった。

今回、かなり大規模なワークショップであったため、当初の計画どおりワークショップが進行するか不安であったが、事前に、Pjリーダー・フロアファシリテーター会議（2回）と学生スタッフ説明会（2回）を開催し、さらに学生スタッフ向けに、(有)アズ・コミュニケーションズの畔上義弘氏に「イベント・スタッフの心得」について講義をしていただき、ほぼ予定どおりワークショップを進行することができた。

参加者からの感想は概ね好評であったが、時間がタイトであったとの意見もあったので、今回は昼の休憩時間を60分から90分に延長するとともに、フロア成果発表会と全体の成果発表会の時間を多くとることとした。

またSKYPj、燕Pj、伝承Pjの3テーマについて参加者に予め参加希望をとっていたが、各Pjの中での個別のテーマの選択については、参加者の希望をとることなく割り振りを行ったことが検討課題として残された。

ウ. ワークショップのアウトプット等

資料に掲載している「10年後の未来新聞」、「マイストーリー」および、「アイデアシート」がWSの成果物である。このアイデアの中には、「UAVによる魚群探査」や「災害時のUAVの非常用発電装置としての利用」等、実際に実現可能なアイデアが多数出され、基調講演を行った小笠原雅弘氏とPjリーダーから高い評価を得た。燕Pjと伝承Pjについても、今後の産業振興、健康長寿社会の実現に向けて実現可能なビジョンが多数出された。

②夢立国第2回ワークショップ

ア. ワークショップの概要

日時：平成25年12月7日

開催場所：新潟大学（新潟県新潟市西区五十嵐2の町）附属中央図書館

参加者：108名（この内、WS参加者92名）

・方法・改善点とその狙い

個別テーマの設定にあたっては、各Pjが日々の業務で直面している課題を直接提示することにした。（例：第1回WS「無人機の活用法」→第2回WS「新潟に航空機産業を立ち上げるには？」）成果物についても、「10年後の未来新聞」から「5年後の未来新聞」に代え、より実現可能性の高いアウトプットを出すことをめざした。

各個別テーマの選択については、参加者の自由意思に任せた。WSの事前説明会において「参加者の希望がないテーマは、テーマとして取り下げる」旨説明し、実際にいくつかのテーマについては取り下げられた。テーマを自由選択制にしたため、参加者の当事者意識が高まり、「前回以上にワークショップがよくなった」との感想がかなりあった。

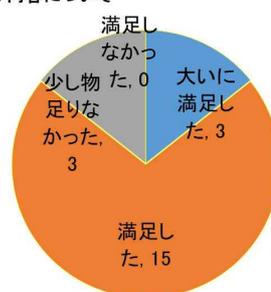
・実施状況

当日のアンケートの結果は右のとおりである。

Q4の夢立国Pjの今後の開催希望およびQ6の夢立国Pjで新潟大学が社会貢献しているかについては、100%肯定する回答であった。

Q3 今回のワークショップについてどのように感じましたか？

①内容について



【ワークショップの進め方やメンバーの話しやすさなど感じた事を自由にお書きください】

- ・様々な角度からの意見が出て刺激を受けました。
- ・一番最初のワークショップをもっと応用させたかったので時間が欲しかった。
- ・順位をつけるよりは、出た意見を組み合わせれば良いのではないかと。
- ・順位付けがしづらかった。
- ・ブレインストーミングと言いつつ、時間が短く細切れで、拡散した話が集約される余裕がなかった。

第2回目は、新潟大学社会連携フォーラムの「なんでもトーク」を夢立国 Pj の一環として行った。同フォーラムは地域住民と学生が、まちづくりについて話し合う場であるので、夢立国 Pj の「高齢者就労先進モデル」のうち、農業と運動とまちづくりについて分科会方式で WS を行った。FG（ファシリテーション・グラフィック）の作成は、学生スタッフと学外ファシリテーターが行った。

第1回 WS では、FG 用紙は紙のものを使用した。書き損じ等の修正が大変だったので、第2回目はビニールの FG 用紙の使用を検討した。ビニールの FG 用紙は通常のホワイトボードと同じで何度でも書き直しが可能で、窓ガラス、壁等にもテープや虫ピンなしで静電気によって貼り付けることができ、メリットが多い。ただし、保管する時に折たたんでしまうことができない、手や服で触ると書いた字が消えてしまう、衣服を汚すことがある等の問題点があることがわかったので、第2回 WS での採用は見送った。上記の点に注意し取り扱いに慣れていれば、繰り返し使用もでき、非常にメリットの多いツールであるといえよう。

イ. ワークショップの検証

・改善と効果

第1回 WS は作業時間がタイトであったので、今回は昼休みを30分延長するとともに、WS の各作業時間の間にも、十分な予備時間を設定した。この点についても、参加者から好評であった。第1回 WS では、参加者と Pj リーダーや事業協力者との交流の場が交流会しかなかった。第2回目は閉会式の後ポスターセッションと名刺交換の場を設けた。これにより参加者間のネットワークの構築が可能となった。交流会には、前回出演の新舞と黒崎太鼓のほか、地元の音楽系サークル「ロス・コバリアーノス」にも演奏していただいた。

WS で使用する机については、通常の会議室でよく使われる長机2本を合わせたものであると、参加者間に「距離」ができ、WS ではなく「会議」になってしまう恐れがあるので、第1回 WS から、この2本の長机より少し小ぶりのものを使用した。さらに第2回 WS では図書館のフロアに常設されていた丸テーブル（直径約1m）も使用したが、参加者の一体感が醸成され WS 環境としては良好であった。ただし、この場合は WS 備品や飲料や荷物を置く机を隣に併設しておく必要がある。通常の長机を使用するのであれば、1本の方がよい。

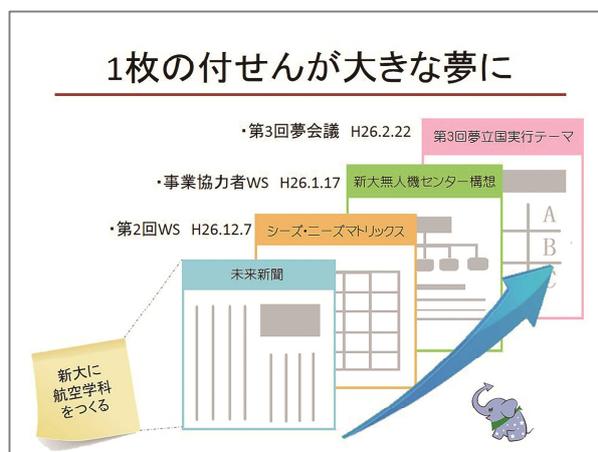
ウ. ワークショップのアウトプット

最終成果物については、第1回 WS では10年後の未来新聞であったが、第2回目は5年後の未来新聞で「特集：日本を変えた20のプロジェクト!」というテーマで記事を書くこととした。特に「最初の1歩」をどう踏み出すかについて、課題を提示した。これにより、第2回 WS は、より実現可能性の高いアイデアや構想が多数出された。より現実的なテーマになったにもかかわらず、参加者の前向きな未来志向と遊び心は、前回に劣らず旺盛であり成果物に反映されていたように思える。

「新潟大学に航空学科を新設する」「シニア合同就活説明会」など実施に向け、実現可能なアイデアが多数出された。

前者については、後述の事業協力者会議で、シーズニーズマトリックスによるブレーストーミングの後、「UAV コアセンター構想」として、発展していった。後者については、十日町市の市役所、ハローワーク、シルバー人材センター、十日町地場産業振興センターと新潟大学で実施に向けた検討会を開催した。この検討会の中で、「シニア逆就活説明会」等の提案も出された。

シーズニーズマトリックスは「アイデア出しのツール」というよりも、自由に出されたアイデアの整理と検討もれの項目の発見のツールとして利用すると効果的である。



第1回WS、第2回WSで生み出された多くのアイデアをどのようにして実現可能なアイデアに結びつけていくかが今後の課題として残された。せっかく一般市民の方から素晴らしいアイデアをいただいても、それが実行に移されなければ、このようなWSを今後継続することは困難になる。そこで、これまで出された未来新聞を時間軸と空間軸により評価し、実現可能性の高いものを整理した。この分析に基づき、まちづくりや人づくりのPjのように、オープンに展開するものと、個別の実務課題で、産官学の共同研究として進めるものとに分類整理した。

オープンテーマについては、第3回WS(夢会議)の中でさらにWSとして展開する一方で、個別の技術課題については、異分野のシニアコンサルタントグループと関連分野の事業協力者で、発明WSと夢コンサルティングを実施することとした。(「発明ワークショップ」および「夢コンサル」の項参照)これにより、3件の共同研究が着手された。

世界			UAVゴビ砂漠緑化計画Pj メイトインツバメ万博 シニアオリビック新潟大会 夢プロinアフリカ	UAVワンタクロース
国	老眼鏡を花嫁鏡に		UAV気象観測飛越農法 カーナビUAVネットワーク	
市町村	野菜アート展	シニアマナー講座・相談会 80歳壮年式、90歳で天皇記念享寿	災害用緊急UAV スカイリアルTV	
企業/商工会	銅鏡磨き ツバメヘルメット 折れない傘 ハート型おもちゃ 金属製レギュメントファイル つまらない醤油差し インテリア鏡 農業レインスーツ 触れるアート展	人間ドック@農業 移動医療車 町工場朝ラ ツバメ「安心」バッグ 大規模農業・工業 健康 医療野菜 デイズニー農園 ゲーム農業 美顔器ハートボリッシュ シニアファッション雑誌 シニア無料大学	介護ロボット 農業ロボット 魔法の水遣管 無人省ロボット キッチンロボット 無人飛行機直送便 魚群UAV探査	誰でも買えるUAV 陸海空兼用UAV UAV家庭用カウバルト UAV引っぱり用
学校/大学			人命救助UAV	UAV空中酒蔵造 運動会UAVレース
地域/自治会	遊び方学校 週休5日輪番農業	UAV農業配布 畑ぎ畑農業	24H多機能コミセン	
ひとりor家族	60歳起業 シニアバンド 湖コウ60 / 80代婚活 シニア半日就労通乗	60歳チャレンジショップ		
				1年以内 3年 5年 10年

③夢立国第3回ワークショップ

A. ワークショップの概要

日時：平成26年2月22日

開催場所：新潟大学(新潟県新潟市西区五十嵐2の町)附属中央図書館

参加者：125名(この内、WS参加者85名)

・方法・改善点とその狙い

第3回の第一部の夢会議のWSでは、WS参加者が各テーマについて自由に質問できるように、付せんにより質問をする方法をとった。通常のWSでは質疑の時間を設けても時間の制約があるため2~3個の質問しかできないことが多いが、付せんにより多数の質問を受けることができる。たとえ時間内に答えることができなくとも、参加者から得た質問や課題提起そのものが、実施する際の貴重な参考資料になると考えた。

当初の計画では午後に成果報告会を開催し、WSを行わない予定であったが、第1回と第2回のWSでWS継続への要望が多かったので、10:30~14:00までを第1部としてWSを行った。

「ワークショップ」という用語は、一般参加者にとって敷居を高くすることになるので、基調講演の講師の中里社長の考案された用語である「夢会議」を用いることとした。

今回のWSでは、第二回目のWSで分類整理したオープンテーマのうち実際に事業の担い手があるもの9テーマについて、WSを進めることとした。前回同様参加者は、9つのどのテーマにも自由に参加できることとした。これにより、前回と同様活発なWSを展開することが可能となった。

今回は、参加者全員にピンクの付せんを用意し、(WS自体は黄色の付せんで行った)昼休みに他グループのWSにもアイデアの付け足しができるようにした。

・実施状況

当日の参加者アンケートの結果は以下のとおりである。

事前に前回までの参加者から有志を募り、夢立国Pjの市民・学生将来構想検討チームを結成した。11名が参加し、1月5日、1月17日の2度に渡り検討会を開催した。また、これとは別に学生チームの検討会も開催し、第3回WSのテーマ9件のうち、3件は学生チームから提案した。

中里スプリングの中里良一社長の基調講演の後、土屋元彦評価委員長、徳島大学三宅洋一郎教授、中里社長、小林研業小林一夫代表の4人のパネリストと実行委員長の松原で「夢の持つ力について」公開討論を行った。会場から、質問用紙と挙手による質問が行われ、活発な意見交換が行われた。

夢Pjの成功事例として全国ヤギネットワーク代表今井明夫氏の「ヤギPj」成果報告のパネル展示と相談会も開催した。

イ. ワークショップの検証

・改善と効果

成果発表会では各テーマ毎に発表を行ったが、その際、参加者に「夢くらべ投票用紙」を配布し、投票を行った。「(「よいもの」2個に○を、「とてもよいもの」1個に◎をつける)。投票結果は、基調講演の間に学生スタッフが集計し、上位3件を金賞、銀賞、銅賞として、学外Pjリーダーから表彰した。参加者自身が選定するものであり、参加者の関心も高かった。投票用紙は、後で各テーマについて、どのような属性の参加者が投票したか分析できるようにした。また応援コメント欄も設けた。

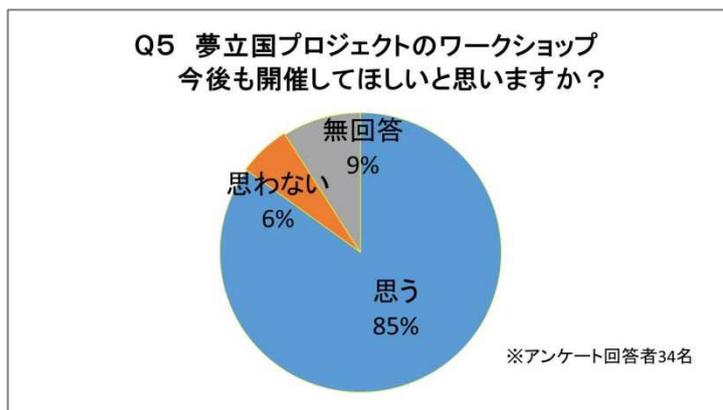
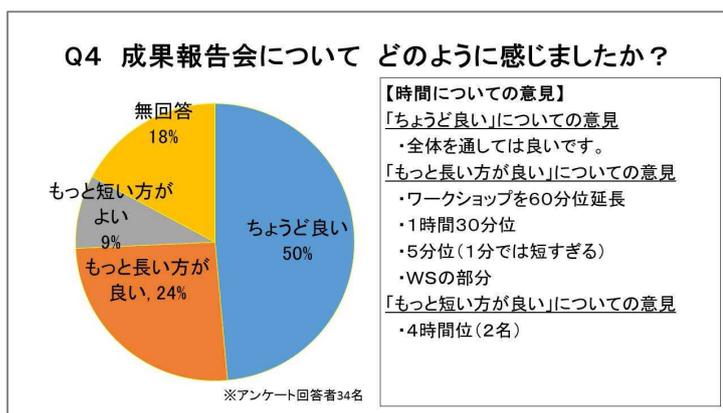
第1回、第2回のWSのランキングで順位に大きく「ばらつき」のあるものは互いに話をしただけ新たな気づきを得ることができるようにした。全く知らない事実や考え方に触れ、活発な討議がなされた。この気づきを書く欄を右側に設けた。ランキングの結果そのものも重要であるが、WSの参加者全員が考え方や感じ方を深めることが、さらに重要であるとのコメントもあった。ランキングについては、一部の参加者から「自分の出したストーリーは最下位にもっていく。申し訳なくて他の人の付せんを最下位にもっていくことはできない。」との意見もあった。この対策として第3回目は各自自分の本当にいいと思うものを書くようにファシリテーターから指示を出した。また、ランキングは各自自分の付せんに一斉に書き、それを学生スタッフに匿名で渡すようにした。今までランキング付けを1人ずつやって十数分分かり、また人目も気になっていたが、これにより時間短縮にもなった。学生やビジネスマンの方々からこのランキングを自分の職場やサークルで使いたいとの感想もあった。

・反省点

開催日の2月22日(大安の土曜日)が学会や各種イベントの開催日に重なっていたこと、学生が長期休暇に差しかかっていたこと等のため、学生スタッフの参加人数は減少し運営スタッフが手薄になった。このため学生のコアスタッフがテマリーダーを兼ねるケースもあり、PAの操作に一部支障を来した。WS自体は新規参加者もあり、これまで通り実施することができた。

ウ. ワークショップのアウトプット

成果報告会では、これまでのWSの成果およびそれらがどのような形で実現に向けてPjが立ち上がってきているかについて報告があった。また、第1部の夢会議WSでは、未来新聞に代え、3ヶ月後の事業の募集広告である「未来広告」を最終成果物とした。9つのテーマについて各テマリーダーから夢広告で成果発表を行った。



この後、「夢くらべ」で参加者全員が投票し表彰した。この一連のプロセスの中で、各Pjの実現に向けてのネットワークを構築することができた。「ドリプラ」、自治体等の関係団体から、Pj実現に向けて連携の申し入れがあった。

第3回WSでは、共感デザインの一環として、本Pjのテーマソング「朝日にかおる」を、第11回新潟県ヴォーカルアンサンブルコンテストで金賞を受賞した新潟清心女子中学・高等学校合唱部の皆さんに歌っていただいた。透き通った歌声が参加者に好評で、最後は全員で合唱し成果報告会を締めくくった。このときの合唱はYouTube上でアップしている。

④東区まちづくりワークショップ

ア. ワークショップの概要

日時：平成26年2月1日

開催場所：新潟市中地区公民館（新潟県新潟市東区古川町）

参加者：35名（この内、WS参加者29名）

新潟市東区のまちづくり講座で、本Pjの「高齢者就労先進モデル」のアイデア出し一環としてWSを実施した。13時から16時と短時間ではあったが活発なWSが展開された。

・実施状況

以下は当日の参加者のアンケート結果の抜粋である。

○初めての方式のWSだった。とても有意義だった。

○地域内での風通しが良い社会を目指す方法（アプローチ）は、様々あると感じた。まずは、出来ることから始めることが大切と思わされた。

○他の方の考え方やアイデアを知ることができ、とてもプラスになった。

○今日は身近なテーマで分かりやすく、時間が短く感じました。

○言葉にすることで、「夢を実現できる」という松原先生の言葉に納得です。

○未来新聞づくりがとても楽しかった。

○良かったところは普段、話すことのない方々と意見交換ができたこと。

○思ったより良い意見、発表があった。Good OK!

マイストーリー・ランキングについては、マイストーリー毎に評価点の最大値と最小値の差を求め、「ばらつき」を数値化し、各未来新聞毎に比較した結果、ばらつきの大きいグループほどグループ全体として未来志向が強く、自由奔放にアイデアが出されていた。一方、ばらつきの小さいグループは、数年後実際に課題解決できそうなアイデアが多かった。（例：第2回WS「新大に航空学科をつくる！」）ばらつきの小さいグループは、「気づき」も少ないように見える。

イ. ワークショップの検証

作業時間が不足していたため、スタッフで事前にランキング記入用紙を別室で作成した。これにより時間内に作業が完了した。

付せんの大きさについては、第1回、第2回のアイデア出しにおいては、75mm×75mmの強粘着のものを使用し、マイストーリーでは75mm×100mmのものを使用したが、今回はマイストーリーが書きやすいように、75mm×130mmの横長のものを使用した。

十分なスペースがあるため1部の参加者は長文のストーリーを書き、ランキングの時内容が目視で分かりにくくなった。このためキーワードに赤線を付けたり、○印をつけ見やすくした。横長ポストイットの付せんへの記入は、ボールペンではなくサインペンにするよう指示すれば、このようなことは防げた。第3回WSでは75mm×100mmの付せんに戻しサインペンで書くように指示した。

ウ. アイデアのアウトプット

6枚の夢新聞と6枚のマイストーリーが成果物である。今回の6テーマのうち1件は、夢立国第3回WS夢会議のテーマとなった。新潟市東区は、「うちの実家」で内閣総理大臣賞を受賞する等、まちづくり活動では、先進的な取り組みをしている地域である。この地域では、現在「孤独死の防止」を最重要課題として取り組んでいる。このような深刻な課題は、つい

つい深刻に考えてしまい出口が見えなくなるケースが多い。今回は夢ワークショップで自由に前向きにアイデア出しを行い、様々なプロジェクトで未来新聞の提案があった。参加者の満足度も、上記参加者のアンケートのとおり高かった。

⑤内野中学校夢集会ワークショップ

ア. ワークショップの概要

日時：平成 25 年 9 月 18 日
 開催場所：新潟市立内野中学校（新潟県新潟市西区内野西一丁目）体育館
 参加者：611 名
 ワークショップによる問題解決手法を使用し、中学生向けに夢集会ワークショップを開催した。中学校の総合教育の時間に対話集会の形で夢立国 Pj の概要と検討テーマについて説明した後、簡単なアイスブレイクを行いアイデアシートに自由記載した。その後防災訓練を実施し、午後から各クラスでアイデアの整理を行った。

総参加者数 1055人

平成25年 9月18日	内野中学校総合学習	611人
平成25年11月 9日	夢立国第1回WS	136人
平成25年12月 7日	夢立国第2回WS	108人
平成25年12月27日	発明WS	6人
平成26年 1月 5日	学生・市民将来構想検討会	11人
平成26年 1月17日	事業協力者WS	17人
平成26年 2月 1日	東区まちづくり入門講座	35人
平成26年 2月22日	夢コンサル	6人
平成26年 2月22日	夢立国第3回WS	125人

イ. ワークショップの検証

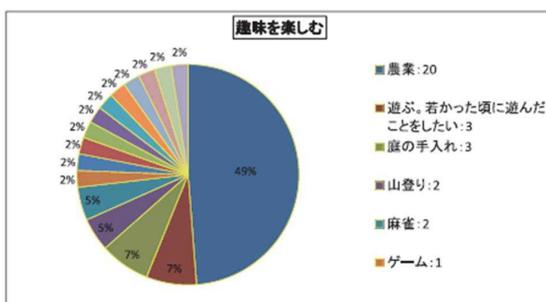
反省点としては、今回初めて参加した3年生に対して、手法そのものを説明する時間が十分とれなかったことである。1, 2年生については平成 25 年 5 月に、2 週に渡り総合教育の時間に「明日の内野を考える」というテーマで、WS 手法を実施していたので（補足参照）、アイデアの整理もスムーズに行われた。

ウ. ワークショップのアウトプット

アイデアの件数も膨大であり類似するものも多かったので、各クラスの班毎にアイデアを集約したものを集計した。中学生ならではの自由な発想が多く見られた。

成果物の長寿健康社会の中の「趣味」の項目のアイデアの集計結果は、右図のとおりである。

C. 身の周りで、年をとっても元気に暮らしている方はどんなことをしていますか？また、あなたならその年齢になったとき、何をしたいですか？(2)



補足

同校で、平成 25 年 5 月 16 日と 5 月 23 日の午後の総合学習の時間に、1, 2 年生約 400 名を対象に「もしも内野の町をどんな町にでもできるとしたら」というテーマで WS を実施した。通常のランキングによるアイデア出しのほか、「これ面白い」に相当するものを、「W」（＝ワラ＝「笑」）で表記し、中学生がどんなものに共感しているのかとらえられるよう工夫した。のびのびと生徒達は自分の気持ちを表現してくれたように思える。

全般的に「ディズニーランド」指向が非常に高いことがわかった。この傾向は新潟市内に限って言えば、小学生や高校生にも共通している大きな流れと言えよう。夢立国 Pj の WS の中でも「ディズニー農園」や「SKYTOPIA」というテーマで発表したグループがあったが、大人たちを含め、世代を超えたあこがれのひとつになっているのかもしれない。

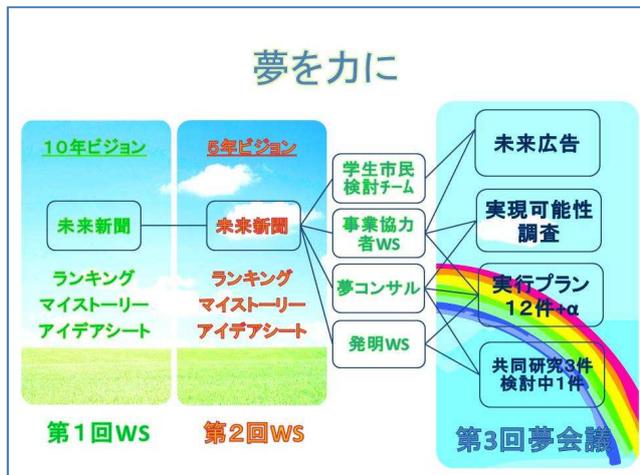
同時に行った「内野のよいところ」の設定では、中学生たちが「自然が豊か」「町の人が優しく親切」「歴史がある」と答えていたが、これは数年前、コミュニティ協議会の講演の際にシニアの参加者を中心に行ったアンケート結果ともほぼ一致する回答であった。

⑥ 発明ワークショップ

事業化に向けての具体的な技術課題については、異分野のシニアコンサルタントグループと課題提供者により対話型発明創造技法(以下「発明WS」)を用いてWSを進めた。

ア. ワークショップの概要

日時：平成25年12月26日(木)
 開催場所：燕商工会議所(新潟県燕市東太田)会議室
 参加者：5名(燕商工会議所産業観光課参事の他、発明創造技法、金属材料工学、バイオテクノロジー、動物栄養学等の異分野の専門家4名)



使用した手法：対話型発明創造技法、ブレインストーミング、TRIZ、究極解

概要：燕商工会議所の「燕 Pj」から派生した諸問題につき、発明WSを行った。WSの詳細については、関係機関からの要請により非公開とする。

イ. ワークショップのアウトプット

発明WSの後、燕商工会議所と新潟大学で共同研究を2件を立ち上げた。現在、新潟大学農学部および県内の研究機関で仮説検証のための元素分析を行っている。

[補足]

一般的に、TRIZ等の発明創造技法は、発明WSの最後の段階で使用することが望ましい。これらの技法をWSの初期の導入段階で使用すると、参加者が潜在的に持っていたアイデアの表出を妨げることにもなりかねない。各参加者のアイデアを出しきった後に、TRIZ等の技法を使用すると効果的である。右図は過去に実施した事例である。

これまで、TRIZは、技術課題の解決にヒントを与えることが、その主たる機能と考えられていたが、別の機能があることが明らかになった。WSで出された様々なアイデアや改善提案は、TRIZの発明原理により直接生まれた場合もあるが、実際にはTRIZを使うことなく経験と直感により解決策を想起し、TRIZの各技法はそれを表現するためのツールとして用いるケースも多い。暗黙知ですでにわかっているものを形式知に表出するプロセスは、通常多大な労力を要する。仮に形式知に表現できたとしても当初の表現はきわめて稚拙なものであるが、関連するTRIZの技法に乗せることで事案が整理され、第三者への伝達も可能となる。この概念の整理によりさらに改善案を想起するケースもある。

[参考文献]「大学教育における発明創造技法の活用」松原幸夫、第4回TRIZシンポジウム(2008)

矛盾マトリックスの適用			発明原理抽出		発明原理		
改善特性	劣化特性	適用原理	頻度	原理	発明原理	関連事例	課題解決
食感	強度	張力/圧力	10.3	18.48	28. カニズム代替	ガス漏れ、悪臭	……
	張力	強度	9.18	3.40	32. 色の変化、温度	温度感応色画による給仕温度調節	……
	強度	測定精度	3.27	1.16	32. 色の変化、温度	高放射率塗料による熱線放射の測定	調理温度調節
測定	強度	強度	28.6	6.92	8. 局所的性質	局所的に機能最適化	ミニホットプレート
	張力	測定精度	6.28	2.25	6. 汎用性	複数機能、標準規格	評価手法標準化
	測定精度	張力	6.28	2.92	40. 複合材料	均一材料を複合材料に実装	……
その他	検出と測定	検出の困難さ	27.8	15.28	15. ダイナミック	異なる固さのファイバー並べ出し	……
	強度	検出困難	27.8	15.40	26. コピー	箱外観による熱線検出	調理温度最適化
	検出困難	張力	35.86	37.32	26. コピー	箱外観による非接触検知	固さの相關測定
	張力	検出困難	2.36	3.37	10. 先取り作用	必要になる前に導入	……
	検出困難	測定精度	26.24	32.29	18. 精神的補助	超音波、共振	超音波で肉を柔らかくする
	測定精度	検出困難	26.24	32.28	31. 多孔質材料	物性を多孔質にする	……

日時：平成 26 年 2 月 12 日（水）

開催場所：「十日町地域地場産業振興センター」（新潟県十日町市本町）

参加者：6 名

（有）花水農産 社長（100ha を超す水田を有する大規模農家）、十日町農業普及指導センター普及課課長、（一財）十日町地域地場産業振興センター専務理事の他、発明創造技法、バイオテクノロジー、動物栄養学、農学、医学等の専門家 3 名

対話手法：ブレインストーミング、対話型発明創造技法

概要：初めに花水農産・宮内社長より、同社の現状と問題提起が行われた。（有）花水農産は十日町市にあり、100ha 以上の田を有する大規模農家である。近年は海外へのコメの輸出を目指して、海外で開催される展示会などに出席しているとのこと。米国でも日本から輸出されるコメが販売されているが、精米してから半年以上が経過したコメがほとんどであり、味が落ちていものばかりである。そこでロサンゼルスでの展示会に精米器を持ち込み、精米したてのコメを現地で提供したところ大変好評であったとのこと。ただし、日本製の精米器は米国での使用は禁止されており、機器の適合検査など、問題が多い。この対策のため、グループ討議を行い解決案が複数提示された。

国内の状況は、近年新潟県産コシヒカリの一等米比率が低下する傾向にあり、また直接のコメ取引の基準とはならないものの大きな影響力を持つ「食味ランキング」で従来はほとんど注目されなかった北海道や九州産のコメが「特 A」ランクの評価を受けるなど、新潟県産コシヒカリの相対的評価は低下しつつある。特に「特 A」の常連であった魚沼産コシヒカリ、中越産コシヒカリ、佐渡産コシヒカリ、岩船産コシヒカリの内、平成 25 年度の審査で「岩船産コシヒカリ」は A ランクに落ちた。新潟県産コシヒカリの味を向上させる取組が必要となっている。

以上のような状況下、花水農産・宮内社長としては、以下の問題提起を行い、新潟大学との連携を望まれた。

・全国を対象とした食味コンクールでは、第一次は食味計で、第二次は味度計で、第三次は官能（食味）検査で判断されるが、「魚沼産コシヒカリ」は入賞しない。評価されていないのは何故か？ 食味が良いことを、科学的に明確なデータに基づいて評価して欲しい。

・十日町市の土壌は、粘土質土壌や河原の砂質土壌の水田もあるが、営農指導は画一的である。土壌により生産形態（栽培方法）をどのようにすればよいか不明である。

・規模拡大に伴い、籾殻の処理に困っている。土壌に還元するにも限度があり、運搬するにも空気を運んでいるように効率が極めて悪い。何らかの解決策はないか？

花水農産としては、自社の田を実験用に提供し、今春から検討を進めたい。

以上の問題点を踏まえ、発明創造技法（究極解、技術進化、発明原理）等も活用し、ブレインストーミングを行い、指導と助言を行った。（関係団体からの要請もあり詳細は省略）

イ. ワークショップのアウトプット

コメの品質（食味を含む）に関する問題では、従来は取引に関する農産物検査法第 3 条に基づく品位等検査が義務づけられている。この検査は、整粒歩合、形質、異物混入率など物理的な検査項目が主に行われ、食味等を分析する成分等検査は任意検査となっている。農協レベルでは、従来、取引に必要な品位等検査を行い、味に関する検査は積極的に行われていなかった。

今回の実験で、各種栽培条件による異なるコメを用い、詳細な食味分

夢立国プロジェクト成果物

・ 未来新聞	57 件
・ マイストーリー	452 件
・ アイデアシート	272 件
・ 共同研究	3 件 + α
・ 発明ワークショップ	2 件
・ 実現可能性調査	1 件
・ 実行予定PJ	12 件 + α
・ メインテーマ・テーマソング	3 曲
・ ポスター	2 枚
・ ムービー	2 本

- ・ 各 WS チームからの成果発表
- ・ 今後の進め方と発明 WS の紹介

3 事業実施により得られた知見・課題等

(1) 本事業による一連の取組を通じて得られた知見・課題等

世代を超え専門分野を超えた参加者により 10 年後のビジョンを描くという今回の事業は、極めて意義のあるものであった。ともすれば夢を描くことを忘れがちな人々が夢を思う存分語り合うことで、気持ちをひとつにして、きずなを作ることができた。

そして、この Pj が文部科学省より提案されたことは大変重要な意味を持つ。このような「夢物語」はともすれば軽視され一笑に付されることも多いが、文部科学省の公式の事業であるため、産官民学のすべての参加者への高い動機づけが可能となった。今回のような Pj を今後も継続してほしいとの要望が多数あった。

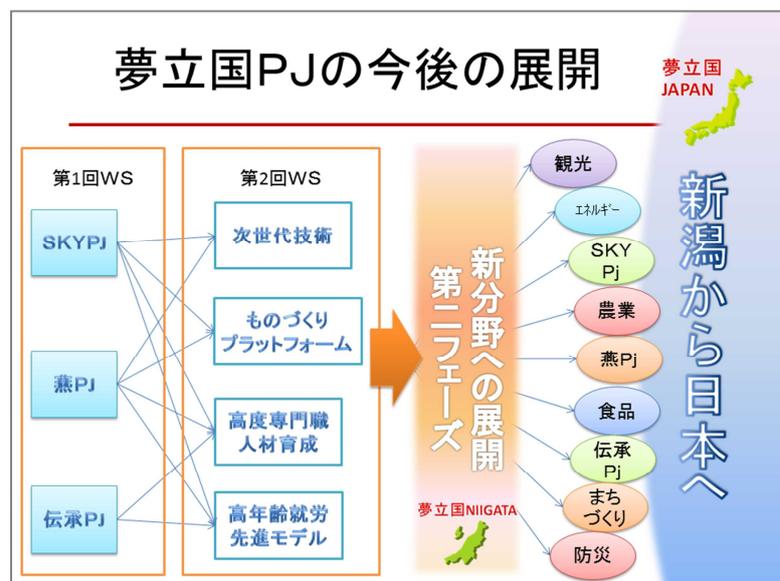
このような事業が今後も継続して実施されるためには、今回の Pj の成果を「夢物語」で終わらせることなく、実際に目に見える形の成果に結びつけることが重要である。

(2) 今後の活動への展望

今回の事業で提案された個別の事業プランをさらに育成支援していくプラットフォームを整備することにより、本事業をさらに拡張発展させることが可能になるものと思われる。

今回は、一部の事業テーマだけで WS を行ったが、今後はさらに多岐にわたるテーマで継続して実施することを検討中である。

各 Pj を実施する際には、自治体、学校、自治会、NPO、ソーシャルビジネス研究団体、ドリプラ等の関係機関と連携して事業展開を行う予定である。



4 その他

(1) 学生スタッフ

本 Pj の運営にあたっては、学内教職員や学外ファシリテーターのほか、学生スタッフがファシリテーター補助として参加した。学生スタッフは一般参加者と同じ立場で参加し、アイデア出しや未来新聞づくりを行うだけでなく、WS のスムーズな運営のために会場の設営、WS 備品の準備、参加者の誘導、FG の作成を行った。WS 関連物品の発注、会場レイアウト設計、タイムスケジュールの作成等にも参画した。また Facebook 等の SNS を活用し、イベントの PR も行った。このほか、学生若者チームの角地智史氏と長井麻衣氏が共感デザインの一環として、ムービーを作成した。

(2) 新聞等掲載一覧

「夢立国プロジェクト」関連新聞記事等掲載状況

- 新潟日報 平成 25 年 11 月 2 日 (土) (朝刊 16 面 イベント紹介記事)
「はやぶさ開発、テーマに講演 9 日、新大」
- 越後ジャーナル 平成 25 年 11 月 10 日 (日) (2 面 取材記事)
「産官民学共同でイノベーション創出
燕、SKY、伝承結び付け、夢立国プロジェクト スタート 新潟大学」
- 市報にいがた 平成 26 年 2 月 2 日 (日) (第 2449 号 4 面 イベント紹介記事)
「ワークショップ 夢立国プロジェクト」
- 新潟情報 平成 26 年 2 月 5 日 (水) (9 頁 生活情報誌、イベント紹介広告)
「～夢を力に～ 新潟大学夢立国プロジェクト」
- 三條新聞 平成 26 年 2 月 10 日 (月) (5 面 新聞広告)
「夢立国プロジェクト ～夢を力に～ あなたの夢が未来をつくる」
- 新潟情報 平成 26 年 2 月 12 日 (水) (15 頁 生活情報誌、イベント紹介広告)
「～夢を力に～ 新潟大学夢立国プロジェクト」
- 新潟日報 平成 26 年 2 月 20 日 (木) (朝刊 11 面 イベント紹介記事)
「『夢立国』計画の検討成果を発表 22 日、新大」
- NHK ラジオ第一 平成 26 年 2 月 13 日 (木) 8:55～ (夢立国プロジェクトの告知)
- NHK ラジオ第一 平成 26 年 2 月 13 日 (木) 13:55～ (夢立国プロジェクトの告知)
- NHK 総合テレビ 平成 26 年 2 月 13 日 (木) 11:40～12:00 「お昼はじょんのびーくらし情報館」 (夢立国プロジェクトの告知)

SKY Pj 関連新聞記事掲載状況

- 日刊工業新聞 平成 26 年 (2014 年) 2 月 26 日 (水) (38 面)
「新潟市に共同工場建設 新潟市産振財団 複数企業で航空機部品」
概要：新潟市産業振興財団は、白根北部第 2 工業団地内に航空機部品の複数工程を一貫して製造する共同工場を建設する。着工は本年 8 月、2015 年 2 月の完成を目指している。敷地面積は約 8,400 平方メートル、工場棟の面積は約 2,900 平方メートルの予定。
敷地内には、「産学官連携共同研究センター(仮称)」も設置され、市内中小企業などが推進している「NIIGATA SKY Project」の開発拠点とする。



NIIGATA SKY PROJECT 無人飛行機(UAV)

- 日本経済新聞(朝刊) 平成 26 年 3 月 6 日 (木) (信越地方版 35 面)
「新潟市が航空機産業誘致第 2 弾 表面処理加工の共同工場」

概要：新潟市が航空機関連産業を誘致するため、白根北部第 2 工業団地内に共同工場を建設し、研究施設を併設する。総工費は、9 億 5000 万円。原料のプレス、熱処理、メッキ、

組立などを手がける企業を集め、全体でアルミ製部品の腐食を防ぐ表面処理ができるようにする。

「企業進出促進へ商工中金と連携 新潟市」

概要：新潟市と商工中金 新潟支店は、市内への企業進出を促すため連携協定を締結。商工中金とは産官学連携による航空機関連産業支援「NIIGATA SKY Project」への協調融資でも連携。

○ 日経産業新聞 平成 26 年 3 月 7 日（金）（12 面）

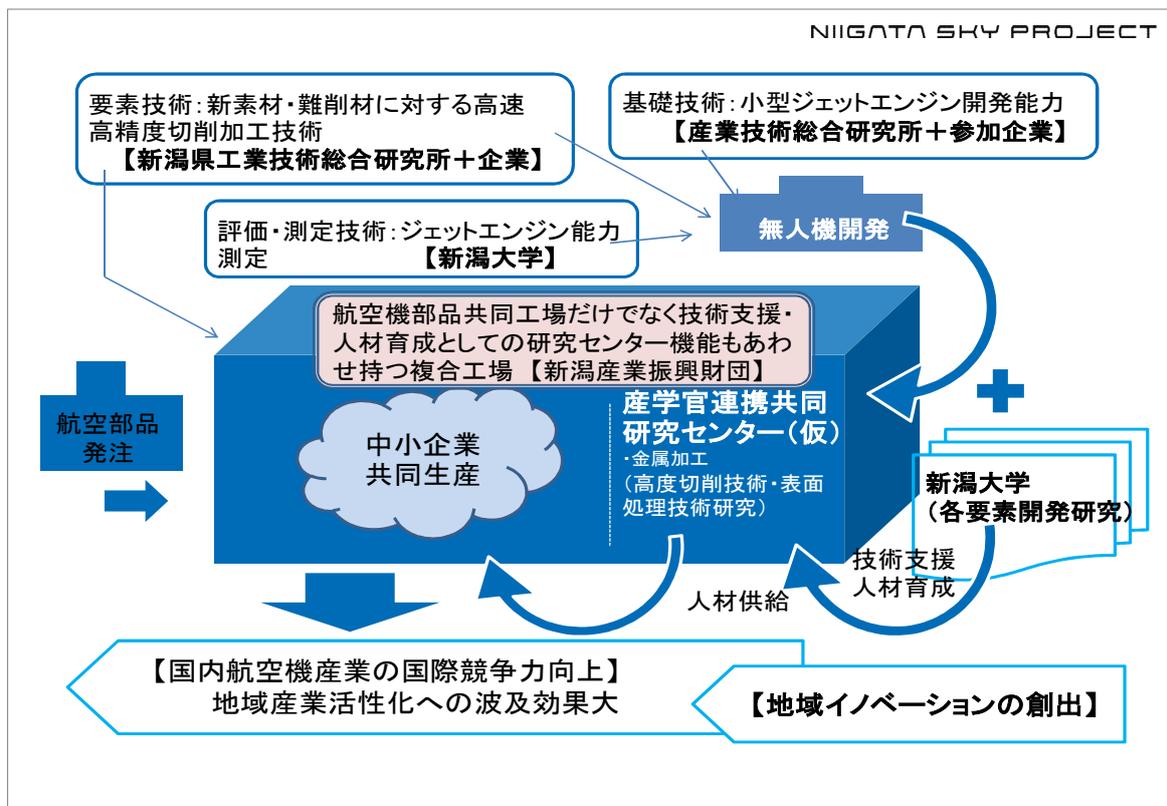
「航空機関連の企業集積 新潟市、中小向け共同工場」

概要：新潟市は、航空機関連産業を誘致するため、受け入れ施設を増設する。既に第 1 弾として、航空機エンジンの部品を製造する中小企業を西蒲区に誘致済みであり、2014 年度はアルミ部品の表面処理加工を行う中小企業向けに共同工場を建設する。南区の白根北部第 2 工業団地内に共同工場を建設し、研究施設も併設する。原料のプレス、熱処理、メッキ、組立などを手がける企業を集め、全体でアルミ製部品の腐食を防ぐ表面処理ができるようにする。

○ 新潟日報（朝刊） 平成 26 年 3 月 13 日（木）（13 面）

「南区に航空産業集積地 市財団 工場と研究施設 建設 今夏着工」

概要：新潟市産業振興財団（IPC 財団）は、南区の白根北部第 2 工業団地に、航空機部品の加工工場と、研究施設「産学官連携共同研究センター」を建設する。「ニイガタ スカイ プロジェクト」の一環。共同工場は、原料のプレス、熱処理、メッキ、組立などを手がける企業を集め、全体で航空機用部品ができるようにする。共同研究センターは約 400 平方メートルで、研究開発や技術者の育成を支援する。



NIIGATA SKY PROJECT「産学官連携共同研究センター(仮称)」構想

平成 26 年 3 月 18 日

文部科学省大学等シーズ・ニーズ創出強化事業「夢立国プロジェクト」評価報告書
夢立国プロジェクト評価委員長
土屋元彦（富士ゼロックス 元代表取締役専務）

本報告書は新潟大学主催の大学等シーズ・ニーズ創出事業に関する評価報告を実行委員会からの要請により、事業内に設置された外部評価委員会が作成したものである。

1. 評価の視点

評価委員会設置の目的は本事業の運営に関する外部評価で、特に PDCA サイクルに基づく夢創造プロセス事業運営の質の向上に資する意見を求められた。そこで、本事業の狙い（本大学がこれまで取り組んできた三つのプロジェクトを核に参加者層の枠を拡大して、対話型ワークショップを用い、地域社会の抱える課題の新しい切り口からの解決とブレークスルーをもたらす）に照らして下記の評価視点を決めた。

- ①参加者層の拡大による産学官連携の絆（ネットワーク）の強化
- ②対話型ワークショップ（WS）によるシーズとニーズのマッチング（アイデア創出）
- ③アイデア実現のための大学主導の社会デザイン
- ④評価委員会活動（これは評価というより、PDCA の観点から、活動の計画段階（即ち P）から活動に参画し必要な時点で、その都度に評価者の立場からコメントをした。その小さな PDCA である振り返りと次段階へのコメント活動の報告）

2. 評価報告

（1）参加者層の拡大による産学官連携の絆の強化

これまでの中核プロジェクト・メンバーに、中高大学生・一般市民・教職員などの新たな参加者を加えて地域社会との連携の枠を広げた試みに関して、狙いである地域社会とのネットワークの強化は成果をあげたと、下記理由から判断した。

- 3 回開催された WS の参加人数が 136 名 108 名 125 名と安定した結果を示したことは、本事業が地域社会に受け入れられたといえる。
- 参加者アンケート結果（事業状況報告書参照）は概ね好評であった
- 同アンケートの自由意見から本プロジェクトにより大学の存在や活動に対する市民への認識が深まり、市民と大学の距離が縮まったことが伺える。さらに、メンバー間の距離、例えば、シニアと若手の間の相互認識が深まったようである。

このような成果は、自由な発想を促すための年齢や肩書を意識させない場づくりや実行委員会が事前に実施した試行からの学習を活用したチーム編成などの工夫配慮が有効に機能したと思われる。

（2）対話型 WS によるニーズとシーズのマッチング（アイデア創出）

本 WS は、三つの中核プロジェクトの技術即ちシーズが将来もたらすであろう効用即ちニーズをチームによる話し合いで夢として思い描こうとした試みである。とはいっても、一般に通用しているシーズからニーズを導き出す方法やニーズの帰納的な方法でなく、夢としての将来ニーズからシーズのもつ可能性を探り、地域社会の活性化につなげようとするところに本 WS の特長がある。そのために文部省の対話ツール「イノベーション対話ツール」他様々な手法を採用している。3 回の WS が実施された。各回の振り返りを参考に小さな改善がなされたが、基本的には、アイデア出し⇒マイストーリー作り⇒ランキング⇒未来新聞作りというステップで作業は進められた。結果として出された成果は、実行委員会の実施状況報告者の通りであるが、量的な評価、アイデアの数からは成果が上がったと評価できる。しかし、具体的な実現への道は半ばであるから、それを待たないと成果の質的な評価は現時点ではできない。

WS プロセスとして評価できる事項は

- A. チームとしてアイデアをまとめる手法として考案された未来新聞
- B. 検討テーマの絞り込み

- 10年後の夢⇒5年後の夢⇒事業の担い手のあったテーマにフォーカス
- 個別テーマの設定に、プロジェクトが抱える課題を直接提示

要は、中核プロジェクト・メンバーとその他一般メンバーでは、テーマに対する知見と経験に著しい差があり、一般メンバーが夢を思い描きやすくする工夫が不可欠であったということがPDCAサイクルを回した結果として分かった。

(3) アイデア実現のための大学主導の社会デザイン

WSでいくら優れたアイデアが出てそれが実現しないことには社会的価値を生み出さない。さらに、アイデアを出した参加メンバーの満足感も満たされない。しかし、この点に関して、実施状況報告書では多くを現在進行であるとし、これからの課題にしている。そのことから判明したように、アイデア実現のためには実現を図る主体者である学外協力者との仕組みづくりが欠かせない。にもかかわらず、そのような実現のための動きが本プロジェクトにおいて計画時になく、第2回WSごろから意識され始めた。その頃並行して開催された評価委員会で議題になったことが契機になり、その動きは活発化した。(詳細は④に記述)そこで出された要望がこのことに対する大学のリーダーシップであったから、評価者は「アイデア実現のための社会デザイン」と称してみたのである。

(4) 評価委員会活動

本事業における特徴のひとつに評価委員会の活動に関する新たな試みがある。本事業の準備段階からの参画を実行委員会から要請され、評価というよりその都度のコメントが求められた。

実行委員会が夢創造にはPDCAが欠かせない、評価委員会がWSプロセスも一つのPDCAであるとのPDCAを重視するという考え方の一致があったから、この試みが実現できた。

次のような評価委員会活動が実施された。

①計画 (P) 段階の活動

2013. 10. 9 両委員長の打ち合わせ

2013. 11. 8 第1回評価委員会 第1回WS前日

主催者側から第1回WSの説明とその計画に対するコメントをもとめられた。

②実行 (D) 段階

2013. 11. 12 両委員長の打ち合わせ

2013. 12. 7 第2回評価委員会 第2回WS当日

2013. 12. 21 三者調整会

実施WSの振り返りと次回WSの説明とコメントが求められた三者調整会は、夢実現のための支援体制を整備するための臨時会議で、大学・中核プロジェクトのリーダー・評価員とでWSで出たアイデアに実現に向けた今後の進め方の調整をした。

③終了 (CA) 段階

2014. 2. 22 第3回評価委員会 WS最終発表会当日最終発表会におけるパネル討論にパネラーの一人として参加、本評価報告書の作成

それぞれの活動内容は下記の通りである。

①計画 (P) 段階の活動

夢立国プロジェクト実行委員会資料で説明を受け、本プロジェクトの狙いは理解できた。新潟大学産学地域機構の経験と実績をもとに、大学教職員、学生、地方公務員、事業者、市民などを集めた、今までにない多様なメンバーによる夢アイデア出しは、現状の延長上でないあるべき姿からの発想という点で評価できるが、それだけに三つのプロジェクトへの認識が各層でレベルに著しい違いがあると想定される。そこで、「夢立国プロジェクトが目指すもの」の周知徹底とプロジェクトごとのテーマ(アイデア出しに用いる質問)が重要であるとコメントした。

②実行 (D) 段階

WSに評価員コメントが反映されたこと及び単なるアイデア出しにとどまらずに未来新聞にまとめるWSプロセスは評価できる。むしろ、夢アイデアを実現するためには、それを実現するために機能する当事者能力を持った主体者が必要で、その主体者を見出し、実現を図る計画

がいるのではないかとコメントした。

そのコメントが参考になったのか、夢立国プロジェクトの実現を目指す活動が開始された。今後の進め方を進める臨時会議（三者調整会）に主催者からの要請で参加した。参加者は、大学職員、各プロジェクトリーダー、評価委員であった。

《会議に実行委員会から提出された評価基準》

- A. 参加者はこの場を楽しめたか
- B. 参加者の絆はできたか
- C. 参加者に達成感があったか
- D. 実現可能性のあるビジョンは出てきたか
- E. WSプロセスは確立できたか
- F. 夢立国PJ自体の将来構想は描けるか

に従ってWS 1とWS 2の振り返りと今後の進め方が話し合われた。ところが、出席者間での取り組みに温度差がありまとまらなかったため、評価委員が調整役を買って出て、次のような結論を出した。

A. B. C. は同時に提出されたWS参加者アンケートからおおむね良好との感触が得られている。D. のビジョンの完成度はPJごとに著しい差が生じているから、今後の一律な進め方は困難であろう。E. は最終報告である。F. は今後の進め方も含めて、大学側が一層の主導性を発揮すること。

③終了（CA）段階

《最終報告会パネル討論》

司会者からの夢の持つ力についてとの問いに対し

- ・夢を持つと、明るく、楽しく生きられる
- ・そうすると夢を実現したくなり、その過程で遭遇する苦しいことにも耐えられ、辛抱強さが鍛錬される
- ・少年よ 大志を抱け!!の名言にあるように夢は成長の源泉であると発言した。

さらに、「とはいえ、夢を中々持てないのは夢を考えてしまうからである。夢は感じるものであるから感じる力（感性）を強くする鍛錬が肝要で、感性を磨くには、他人との対話による刺激と融合が役立つ、そこに今回のWSが意味ある」と付け加えた。

3. 総括

本プロジェクトは、帰納でなくあるべき姿からのニーズとシーズのマッチングを目指した挑戦的な試みであり、その意欲は評価される。あるべき姿である将来ニーズを夢として描き出すために、今までに育んだ中核プロジェクトに無関係な学生・一般市民を入れて固定概念にとらわれずに自由な発想でWSを実施した。結果としては、アイデアの質というより、そこに用いられたイノベーション対話ツールの効果と思われるが、広範な参加者間で共感を共有しながら対話の面白味を味わい、そこから得られる深い相互認識にもとづくアイデアが創造されるという、夢創造プロセスの実験的試みが成果であったといえる。それは、新潟大学の産学官連携の絆の強化として今後の産学官連携事業の進展に多大な好影響を与えると期待できる。

ニーズとシーズのマッチングの観点から高水準のアイデアが創出できたかについては、今回の3回のWSおよび、発明WS等から3件の共同研究が着手されており、今後の成果が期待される。また、一般参加者が参加するWSで、ニーズとシーズのそれぞれの提供者間で、社会経験と生活環境の違いから生じる知見、興味および意欲のレベル差を可能な限り生じさせないような配慮が今後必要であろう。

また、アイデアの実現については、そのことを実行する主体者を計画段階から選定する必要性を痛感した。

このような大学主導の社会デザインを目指した活動を継続進展させて、社会各層を巻き込んだサイクルアップしたシステムの整備とそれが地域社会の発展に寄与することを切望している。

以上